出生人口の割合をとつたことについては何等の特別の意味はない。他の目的の爲に算定してゐた有り合せの數字をそのまま利用したに過ぎない。然し、其の指示する意義は兩者異るところはない。

(四一) 鄉土性は出生の地域從つて幼少年期成育の地域と密接なる關係を持つてゐる。故鄉、鄉土の概念を社會學的に研究せられた次の異色の力篇を參照。

臼井二尙　「地域的社會圈としての故鄉と鄉土」——哲學研究、第二二卷第二册、第二三九號及第二二卷第四册、第二四一號。

(四二) 中川與之助　「我國社會の基本的變化としての都市化」——財政、第二卷第五號、昭・一二・四。

(四三) 相關係數の性質については例へば次の名著に明かである。

(1) 醫學博士古屋芳雄　「醫學統計法の理論と其應用」、第四版、昭・一六、一一八—一一九頁。

(2) 森田優三　「統計概論」、昭・七、二八七—二八八頁。

(四四) (1) Rudolf Heberle: Über die Mobilität der Bevölkerung in den Vereinigten Staaten, 1929.

本書の中最も重要な第二篇 Soziale Wirkungen der Mobilität の邦譯が米林氏によつて爲されてゐるが、途中迄次に發表せられてゐる。

(2) 米林富男　「アメリカ社會と人口移動(一・二)」——人口問題、第四卷第一・二號、昭・一六・八及一一。

尙、次の簡潔明解な論文參照。

(3) 林　惠海　「人口の社會形態學的作用性に就いて」——社會學、第四號、昭・八・一。

(四五) Otto Most: Bevölkerungswissenschaft, Eine Einführung in die Bevölkerungsprobleme der Gegenwart, Zweite Aufl., 1927, SS. 144—145.

民族立法としての人口政策

其の一——二三の方法論的省察——

本多龍雄

はしがき

「社會立法」といひ或は「勞働立法」といふ通例の造語法に隨つて特に「民族立法」といふ言葉が許されるなら、今日の人口政策の歷史的意義はかかる民族立法としての性格を擔つてゐる點にあるといふことを明かにしてみたいと思ふ。題して「民族立法としての人口政策」といふ所以であるが、本號所載の部分はその緖論的研究として特に人口問題に關する多少の方法論的省察を試みたものである。意圖するところは專ら問題の所在と聯關とを多少とも整理してみようとするにあつて、論辯考證を主眼としたものではない。

一、人口問題の歷史社會的性格

「人口」とは特定の社會經濟生活を營む多少とも恒常的な歷史社會的實在の本質をその量的諸限定に於て把へるところの概念であるといつたら當然

のことを殊更にまわりくどくいひ表はすスコラ趣味の譏りを免かれ難いかも知れないが、所謂「人口」問題の歴史社會的性格を幾分でも原則的に限定するに役立つならかやうな教壇學者的概念構成も強ち無駄ではなからうと思ふ。「人口」統計が展開する各種の量的諸限定も特定の歴史社會的實在に固有な本質的價値を表徴する價値指標としてこそ本來の意義を充足するといつてよい。いひ換へれば特定の生活集團がその數の變化（人口增減等）と、之に伴ふその構造的乃至は形態的變化（年齢構成、階級分化等）を介して當該社會の內的本質とその傾向とを自ら物語るとき我々は之を「人口現象」といふのである。

が歴史社會的實在の本質は何よりも先づその社會經濟的諸條件に於て限定されねばならぬ。社會經濟生活の諸形相を離れて別に歴史社會的實在なるものの本體はないと考へることもできる。さういふ意味で人口現象とは當該社會の社會經濟的諸狀況の最も直截且つ明確なる指標でなければならぬ。之を喩ふれば恰も人體の生理學的狀況に對する脈搏や體溫の如くであるといつてもよいが、併しこの喩へには語つて猶ほ盡さざる謬りがあらう。といふのは謂ふところの人口現象とは當該社會の社會經濟的諸狀況を最も直截明確に表示するところの指標であるばかりでなく、寧ろ之を善い意味にもせよ惡い意味にもせよ愈〻助長し促進し發展せしめるところの實在的な力に外ならないからである。さういふ意味では人口現象こそ歴史社會的實在にとつて寧ろより本質的な現象であり、社會經濟生活の發展は單にその外的諸條件を爲すものに過ぎないと考へることもできる。社會經濟生活とは民族乃至は國家の全存在價値の上から見れば、假令如何に基本的なものであるとはいへ、猶ほその一條件たるに過ぎないものと考へられるのである。

要之、一面に於ては社會經濟生活の諸相を離れて別に歴史社會的實在なるものの本體はなく、人口現象は社會經濟現象の一斷面に過ぎないと考へることができると同時に、他面に於ては寧ろ人口現象こそ歴史社會的實在に固有なより本質的現象として、社會經濟生活に對する批評的契機を包藏してゐるといふことができよう。そして社會經濟的諸條件に對するかかる再吟味を伴ふことなしには總じて人口現象は所謂「人口問題」として捉へられることがないといへると思ふ。過剩人口への杞憂も乃至は出生減退に伴ふ人口再生產力喪失の危險も等しく當該社會に特有な社會經濟生活に對する再吟味を伴ふといふ點に於てこそ「人口問題」としての存在理由があり、そしてかやうな內省運動こそ同時に歴史社會的實在なるものの本來の存在目的と存在價値とに對する自覺の成立を意味する。人口現象こそ歴史社會的實在なるものの認識根據であり、逆に文化價値の體現者としての歴史社會的實在は人口現象の實在根據であるといふこともできよう。そして所謂「人口問題」とはかかる文化價値體現者としての特定の歴史社會的實在に對してこそ提起せられるところの文化價値的問題に外ならぬといふこともできると思ふ。地球の上には一體どれ程の人間が生活することができるかといふやうな問題は、問題それ自身として別に意味がないわけではないが、本來の人口問題と稱するには足りないのである。

二、人口理論への方法論的要請

事情は右の如くであるとしても、併し人口問題は必ずしも凡ての時代に於てそのやうな問題の核心から取り上げられたわけではない。それは問題の歴史社會的性格からくる當然の結果でもあるが、特にその社會經濟的制約性は屢〻階級的利害との葛藤を伴ひ勝ちで、一方に人口現象の本質的意

義の强調せらるるにつれてその反面には之を却つて人爲の如何とも爲し難い自然必然的な事象として表象しようとする傾向を生じ易い。マルサスの人口理論はその最も代表的なるものである。マルサス人口理論の考證的檢討は本稿の目的ではないが、その理論的傾向について多少とも態度を明かにしておくことは單なる學術的論議以上に今日も猶ほ相當の實際的必要があらうと思ふ。

マルサスの人口理論が今日に於ても猶ほ大衆的な關心を喪はない最大の理由の一つはその理論的結構がもつてゐる極めて常識的な簡明さにあらうと思ふ。人口は何らの障害さへなければ無際限に、從つて結局は生存資料以上に增殖しようとする傾向を有つてゐるといふ命題に定式化されるマルサスの主張は、貧困と災厄とが古往今來かかる過剩人口防止の爲の唯一の社會的制動力として働いて來たといふ裏の主張を常識的な簡明さを以て說得する爲には恰好の前提で、その表裏相卽した直截平明な理論的構成がゴドウィン流の社會改革者的理想の非現實性を大衆的に納得せしめる論辯的效果は之を承認するに吝かでないが、併し現實社會の社會進化過程は必ずしもそのやうな單純な定式化を承服するものではないと思ふ。特定の社會經濟的諸條件から抽象された無際限な人口增殖力といふ思想は一つの觀念的抽象で、社會生活の本質的機能を專らかかる增殖力の抑制作用に見ようとする裏の主張を離れては極めて內容の漠然としたものである。我々の社會生活に固有なさまゞの習俗と傳承とは確かに一面に於てはマルサスの所謂「無際限な」增殖傾向を制限し抑制する力であるには相違ないが、併しそれは同時に又そのやうな動物的本能を眞に人間的な生命力として繼承し育成してゆく爲に缺くべからざる條件でもなければならない。制限し抑制することが新しい人間的意慾として之を形成し發展することでもあり、人間的意慾の育成と淘汰には同時に社會的な抑制作用を伴ふを常とする。そのやうな正逆相矛盾した傾向の統一の中に於てこそ人間社會の進步といふものは可能なので、それが自然の力を本當に人間的な力として再現しようとする我々の「文化」といふものの本來の姿でもあるわけだ。假りに若し現代の文明人が所有の觀念に習俗法的な制肘もなく、社會的な節度や羞恥感に情操を陶冶されることもないやうな世間に突然と住み替へさせられたとしても、我々の社會的制縛が動物的本能として表象してゐるものが果して無際限な增殖力となつて再現される如何かは極めて疑はしい。

史實の考證するところに見ても、人類文化史上最初の劃時代的な事件である定住生活の開始と之に伴ふ農牧的生產經濟の成立は同時に「家」を單位とするところの生活形態の成立を導いた。當時の大家族生活の內容を現代の單婚家族のそれと同一視することの不當なのはいふ迄もないが、併しまた「家」の生活ほど人類文化史上その本質的な意義と機能とを連綿として持續してきた文化所產は他にないといつてよいと思ふ。そして農耕民族の出現と表裏したこの家族生活の成立こそ人間增殖力を異常に增大させた最初の事件でもあつたものである。而かもかかる家族生活の成立こそ所謂「無際限」な增殖傾向にとつては最も强力な社會的抑制作用の成立に外ならないものである。と同時にこの家族生活の成立は、更に質的觀點から之を見ると、種族の優生的淘汰の爲に缺くべからざる役目を受けもつたものである。抑制作用は寧ろ質的淘汰の爲の社會的制約として取り上げられたといふこともできるわけで、種の增殖と其の淘汰とを兼ね備へた自然の叡智はここに恒常的な社會制度として初めて人間的營爲の中に再現さるるに到つたといふこともできると思ふ。人口增殖力も乃至はその抑制的諸要因も等しく人間的營爲に固有な歷史社會的現象の一環としてこそそれ本來の意

味を有つてゐるわけで、之をその社會經濟的制約や歴史社會的前提から抽象することは、問題の核心を殊更に問題解決の聯關の外に逸脱させることを意味する。さういふ意味ではマルサスの人口理論が産業革命直後の英吉利に於ける貧民問題を資本家階級の爲に辯護したものだといふ一派の論者の批評も必ずしも不當とはいひ難いと思ふ。人口增殖傾向がもと〳〵人爲を超えた自然の法則であるなら窮乏と災厄とによるその抑制も直接には何ら社會自身の責任ではないわけだ。

尤も數千年來の世界歴史の實證するところを見ると、人間社會は自ら形成した人口增殖力をただ窮乏と災害とによつてのみ抑制し調節して來たかの如き觀がないでもない。併し又同じ史的回顧が我々に教へるところは世界史上に登場したさま〳〵の指導的民族は出産力の減退と民族人口量の弱少化とを以て世界歴史の舞臺からの退場を餘儀なくされてゐるといふ事實である。乍併、過去の史實が物語るそのやうな矛盾した現實は自然の叡智を再現した筈の人間社會が實はその理想とするところには猶ほ遙かに遠いといふ事情からくる。のみならず過去に於ける所謂文明開化の方向は寧ろかかる理想から逸脱することを常としたとさへいふことも不可能ではない。だからこそ一方に人口增殖力の本質が文化所産として理解されるよりは寧ろ自然本能的な衝動として解釋されると同時に、人間社會の社會的機能も亦もつぱら自然必然的な、言はば暴力的な抑制力として表象されるわけで、マルサス人口理論の極めて常識的な理論的結構が大衆的魅力を有つ所以も亦そこにあると思はれるが、併し我々の理論的關心の目的とするところは過去の不足を永遠化することではなくて將來への努力を準備するところになければならない。それが總じて問題の理論的究明に要望せられる第一義的な方法論的要請でなければなるまいと思ふ。特に現下の人口問題はその現實的な切迫性からもかかる方法論的要請の自覺を愈〻必要とするに到つたといへると思ふ。

三、現下人口政策の歴史的課題

マルサスの人口理論は教壇學者の論題としては今日もなほ影響するところ尠くないといつてよいが、マルサス理論の登場を當然とした當時の英吉利貧民問題は英吉利資本主義その後の發展により社會變革期に於ける一時的波瀾として押し流されて了ひ、十九世紀資本主義下の西歐諸國は飛躍的に增大された人口收容力を以て未曾有の人口增加時代を現出した。ブルグドエルフアーのいつてゐるやうに近代資本主義は約二倍の人口量を略〻倍加せる生活水準を以て扶養するに到つたといふこともできる。而かもこの異常な人口膨脹の世紀は既にその七十年代以降の西歐諸國に出産減退の傾向を開始してをり、今世紀以降、特に前世界大戰を境として西歐諸國の出産減退は遂に各國の人口再生産力を危殆に瀕せしむるに到つた。過剩人口の杞憂は一轉して人口減少による民族力弱少化の危機に取つて替はれたわけで、今日の人口問題は問題自身の現實的必要からも、民族生命の文化價値的自覺と之に伴ふ近代資本主義的社會經濟體制の再吟味とを餘儀なくされてゐるといつてもよい。勿論客觀的狀勢のかやうな急變も必ずしも人口問題の性質を一變したわけではなく、寧ろ人口問題本來の核心を現實的な切迫性を以て登場せしめるに到つたと考ふべきものであるはいふまでもないが、併し近代社會に特有な問題相貌の轉換が包藏してゐる歴史的な意義については特に注目する必要があらうと思ふ。

惟ふに近代資本主義社會は産業技術の飛躍的な進歩とその廣汎なる社會

的利用とによつて所謂「人口收容力」を劃時代的に擴大した。或は寧ろ近代社會とは技術の最大限の進歩と利用との爲に要請せられた社會經濟體制たる點にその歷史社會的な存在理由をもつてゐるといふこともできよう。過去の孰れの時代に於ても技術の進歩、生產力の發展がその社會生活形態の基本動力でなかつた時代はないといつてよいが、技術の進歩、生產力の發展そのものを寧ろ至上の目的價値とするところの社會は近代と共に初まるといふことができる。併し之が爲にこそ近代資本主義社會は社會生活形態の根本的な再編成を必要としたわけで、我々が恰も人間自體の當然の姿であるかの如く日常無關心に眺めてゐる我々近代人の姿も實はこの近代社會がその社會的必要に應じて生產し、且つ不斷に再生產しつつある一つの歷史社會的現象であることに變りはない。そして自由で平等な個人としてその鋭い自意識を日夜自己一身の社會的榮達の爲に驅使してゐなければならないこの近代人の生活が父祖傳承の生活傳統に根ざした「家」の生活と之に伴ふ健全なる「出產力」にとつて特に破壞的な傾向を宿してゐることは既に多くの識者の指摘してゐるが如くである。近代社會が技術の進歩と生產力の發展といふ言はばその歷史的使命を達成する爲に支拂つた代償は、一言にして之を言へば、人間を凡ゆる意味に於てその傳承的な生活傳統から解放したといふ點にあるといふこともできると思ふ。而かも家を持ち子を養ふといふ人間的營爲こそ本來日常的な思議打算の埒を超えた生命現象の最も著しいものであつて、その鄕土的環境に、或はその職能的身分に、その他凡ゆる意味で我々の社會生活を構成する諸制度に表現せられる安定せる生活傳統の堅持は之に不可缺な現實的基礎をなすものであつたといつていいと思ふ。いひ換へれば、所謂「人口收容力」を劃時代的に增大せしめた近代社會は、同時にその同じ目的と運動とによつて、健全なる「出產力」の根本前提であるものを破壞しつつあつたといつてよいのである。それは近代社會に特有な歷史社會的矛盾の一表現と解すべきもので、所謂「人口收容力」の最近に於ける多少の停滯鈍化が直ちに異常な「出產力」の減退として結果せざるを得なかつた根本の理由も亦そこにあると思ふ。

總じて反撥對抗的な傾向の發展は凡ての歷史社會的實在に固有な運動法則で、矛盾こそ實在の本質であり運動の根源であるといふことも不可能ではない。土地と結びついた父祖傳承の世襲家業的生活によつて我々近代人の生活とは凡そ對照的な自足せる安定感を有つてゐたと考へられる封建社會の生活形態も技術の進歩、生產力の發達に對する封建的拘束や之に伴ふ人口收容力の中世的停滯と不可分に表裏したもので、その爲にこそ封建社會の傳統的生活はその末期に於ては不斷に動搖苦惱してゐたといつてよい。そこに近代社會登場の歷史的理由もあるわけだが、技術の進歩と生產力の發展に最高の目的價値を置いたといつていい近代資本主義社會は「人口收容力」を劃時代的に增大し乍ら却つて「出產力」の根本的前提たる安定せる生活傳統を崩壞して了つた。そこに近代社會に特有な人口問題上特に深刻な矛盾があるわけで、それは嘗て人類史上に往來した指導的諸民族の末期的現象を國際的な一時代的現象として再現したものといつてもよいと思ふ。而かも個々人の生活樣相に指摘せられる生活傳統の崩壞こそ之を大にしては一民族がその民族的生命を保全し發展しゆく爲に不可缺な民族人口の構造的分化の解體を意味するわけで、現下の人口政策が近代的出產減退に對する對策として進んではかかる民族解體の危機に對する根本對策にまで遡らねばならぬ所以はそこにある。そして近代資本主義社會經濟體制に對する再吟味と近代的高度生產力を媒介とした新しい生活傳統、民族文化への構想とは之が不可缺の前提を爲すもので、人口問題の歷史社會的性格は現下の人口政策に於てその最も本格的なる相貌を以て立ち現はるるに到つたといふこともできよう。或は人口問題は今日に到つて初めて問題そのものの本來の深刻さと、併し又同時に問題解決への歷史的必然性とを以て成立したとさへいふこともさして言ひ過ぎではないと思ふ。